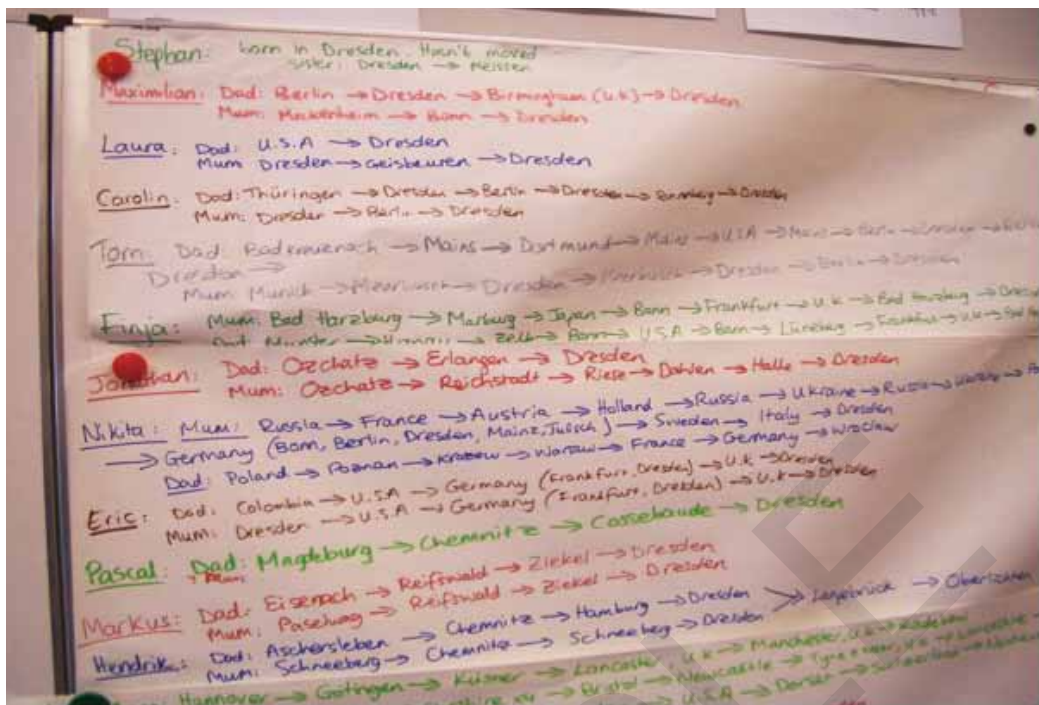




ドイツのあるインターナショナル・スクールの教室 p.8「移動する時代と子どもたち」より

はじめに

日本にも、海外にも、日本語を学ぶ子どもたちがいます。よく見ると、家の中で親のことばを話し、学校で日本語を使う子ども、また逆に、家の中で日本語を話し、外でほかのことばを使う子どももいます。そんな子どもが世界各地に増えています。

この本を手取るみなさんの中にも、あるいは知り合いの中にも、幼少の頃から複数のことばの中で成長した人がいるのではないのでしょうか。この本のタイトル「日本語を学ぶ／複言語で育つ」というのは、複数のことばの中で成長しつつ、同時に、日本語も学ぶという子どもの姿を表しています。この本は、そのような子どもたちがどのように生きているのか、また私たちはそのような子どもたちをどのように育てていったらよいのかを、「ことばの学び／ことばの教育」の視点から考えようという本です。

ただし、子どもたちは多様で、日々成長しています。一人ひとりの子どもに合った「ことばの学び／ことばの教育」の答えは一つではないでしょう。この本が「ワークブック」となっているのは、「これらのテーマについて、いっしょに考えてみましょう」というメッセージです。ですから、この本の中に、たくさんの問いとディスカッションのテーマがあります。しかし、正解が示されているわけではありません。この本は、受講生のみなさんとともに考えることを第一に重視したテキストなのです。

この本は、大学の学部用のクラスで2年間にわたり使用したテキストをもとに編集しています。授業担当者が一方的に話す講義形式の授業ではなく、受講生がテキストを読み、話し合い、ともに学ぶという対話重視の協働学習のクラスを提案しています。

複言語で育つ子どもに関する、日本語教育の新しい実践教育がここから始まるのです。

川上 郁雄

目 次

はじめに	1
このテキストを利用されるみなさまへ	4

第1ステージ 子どもの直面する課題を考える 7

① 移動する時代と子どもたち	8
② 日本で日本語を学ぶ子どもたち	12
③ ことばの学びとことばの力	16
④ 海の向こうで日本語を学ぶ子どもたち	22
⑤ ことばとアイデンティティ	28
⑥ それぞれの「日本語」	32

第2ステージ 子どものことばの学びと実践を考える 37

⑦ 複数のことばの中で育つということ	38
⑧ 社会の中で育つことば	42
⑨ 子どもたちの心とことばの学び	46
⑩ ことばの学びを支える「教材」1	50
⑪ ことばの学びを支える「教材」2	54
⑫ ことばの学びを支える言語活動	58

第3ステージ 子どものライフコースを考える

61

- 13 ライフストーリーを解釈する 1 62
- 14 ライフストーリーを解釈する 2 70
- 15 ライフストーリーを解釈する 3 80
- 16 ライフストーリーを聴く 90
- 17 ライフストーリーを書く 96
- 18 意見交流会と全体の振り返り 104

キーワード一覧 108

もっと勉強したい人への読書案内 110

本テキストの授業デザイン 113

あとがき 128

▶ なぜこのテキストを作成したのか

現代は大量の人々が国境を越えて移動する時代です。海外転勤、国際結婚、移住、留学、紛争地からの避難など、移動の理由はさまざまですが、共通するのは、移動する大人たちの陰で、小さいときから複数のことばを学びながら成長する子どもたちがいるという現象です。成長期に複数のことばを学ぶことは、その人の人生にどのような影響を与えるのでしょうか。このテキストは、そのような幼少期より複数言語環境で成長する子どものことばの学びについて、日本語教育の視点から考えることをテーマとしています。

このテキストでは、子どもが幼少期より複数のことばに触れ成長するとどのような状況に遭遇するのか、突然国境を越えて移動した子どもの場合どのように新しいことばを学ぶのか、またそのような複数言語環境で成長した子どもが青年期から大人になるときに複数のことばを話す自分とどう向き合い、アイデンティティを形成していくのかなどについて考えます。

さらに、そのような子どものことばの学びを研究し記述する方法を学び、21世紀に増加すると予想される複言語で育った人と社会のあり方、多様な背景を持つ人々との共生社会について、クラスで考えることを目標とします。

▶ このテキストは、どんなところで使用できるのか

このテキストは、日本語教育、特に子どもの日本語教育を学ぶ大学生、また教員養成課程で将来小学校や中学校などの教員を目指す大学生の授業、あるいは、日本語教師を目指す日本語教師養成講座、地域で活躍する日本語ボランティア養成講座などでも利用できます。

▶ このテキストを使うクラスの到達目標は何か

このテキストを使うクラスでは、以下のことを到達目標とします。

1. 幼少期より複数言語環境で成長する子どもが増えている現代社会の現状を理解すること
2. 子どもが複数のことばを学びながら成長するとき、どのような課題に遭遇するかを理解すること
3. 複数言語環境で成長する子どもに対することばの学びの支援について理解すること
4. 複数のことばを学びながら成長する子どものアイデンティティ形成について理解すること
5. これらの子どもたちのことばの学びについて考え、研究する方法について学ぶこと
6. 以上を踏まえて、21世紀の人のあり方と社会のあり方について考えること

▶ このテキストは、どのように使用するのか

このテキストには全部で18回の授業案が提案されていますが、大きく分けて、以下の三つのステージで構成されています。そのステージの流れを活かしつつ、各テーマからクラスにあった授業案を選んで学ぶことができます。

第1ステージ：子どもの直面する課題を考える（第1回～第6回）

幼少期より複数言語環境で成長する子どもの社会的背景や複数のことばを学ぶときの基本的な課題について、さまざまな角度から検討します。移動する時代に生きる子どもたちの課題は、社会的かつグローバルな課題であることを理解します。

第2ステージ：子どものことばの学びと実践を考える（第7回～第12回）

そのような子どもたちが実際にことばを学ぶとき、どんな課題に直面するのか、具体的に検討します。特に、ことばの教育をイメージできるように、生活、社会、教材などの視点から、子どもの主体的な学びや生き方、そして子どもたちのことばの学びの支援について考えます。

第3ステージ：子どものライフコースを考える（第13回～第18回）

幼少期より複数言語環境で成長する子どもが成長し大人になっていくとはどのようなことかを考えます。そのため、移動する時代に生きる子どもたちの具体的な例を見ながら、彼らのライフストーリーを読みます。さらに、受講生が将来、教育現場で子どもたちをどう見るか、そして子どもの研究をどのように進めるかについて学びます。

▶ このテキストを使い、どのようにクラスを展開するのか

このテキストは、対話的な学び、協働学習を重視して作成されています。そのため、各授業案には、「考えてみよう」「話し合いましょう」といった問いが多数含まれています。授業担当者が「正解」を「解説」する「講義型の授業」ではなく、一つのテーマや問いについて、受講生が積極的に発言し、またその発言に耳を傾ける相互の学び合いの関係を重視しています。そのことが、クラス全体の学びの支持的風土を作り上げていくことにつながります。

したがって、課題や問いについて、受講生はまず自分の意見を書き、それから近くのクラスメイトと意見交流をしましょう。自分の意見を書く時間や話し合いの時間を十分に取ることが、このテキストを利用するコースの成功の秘訣です。

なお、各回の授業の進め方のヒントや留意点などは、巻末の「本テキストの授業デザイン」にまとめて示していますので、ご参照ください。

第1ステージ
子どもの直面する課題を考える

第1回

移動する時代と子どもたち



小さいときから複数のことばに触れながら成長する子どもが、今、世界中で増えています。子どもたちは、この移動する時代にどのように生きているのでしょうか。

1 ▶▶ 写真を見て、考えてみよう

まず、1 ページの写真を見てください。

これはドイツのあるインターナショナル・スクールの教室の写真です。左端にあるのは子どもの名前です。そのそばに Dad（父）、Mum（母）とあり、両親の生まれた都市名から移動した都市名が続いています。子どもの両親がどこで生まれ、どの都市を移動して、この学校のある町まで来たのかがわかります。

- 問1. この写真にある子ども、そしてその両親は、なぜ移動しているのでしょうか。その背景には、どのようなことがあると思いますか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

2 ▶▶ 次のエピソードを読んで、考えてみよう

【エピソード 1】フィリピンから来たマリアのケース①

マリアは、小学2年生のときに母親と来日しました。編入当初、まったく日本語ができませんでした。担任の私と母親とは片言の英語が通じましたが、マリアには英語も通じませんでした。私は、マリアの母語で通訳をしてくれる人を探しましたが、見つかりませんでした。マリアは、授業中、黙って座っているだけです。せめて、通訳が授業の内容を伝えてくれたらと、私は思いました。マリアは、日本語を覚えることも、ひらがなを書き写すこともできませんでした。

(クラス担任の証言)

問2. あなたが小学生の頃、外国から来たこのようなクラスメイトがいましたか。

.....

.....

.....

問3. 日本で、このような子どもが増加する背景には、どのようなことがあると思いますか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

問4. これらの子どもたちが直面する課題には、どのような課題があるでしょうか。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



▶ 沈黙期間 (Silent Period)

第二言語習得の初期段階で見られる「話さない時期」のこと。子どもは周りを観察し、必要な情報を吸収している。話さなくても、理解している場合もある。この期間が1か月、3か月、半年など、子どもによっても異なる。

▶ 取り出し指導

在籍学級で授業に参加するには日本語がまだ不十分な子どもがいて、その子どもを在籍学級から取り出し、ほかの教室等で日本語指導を行う。一日1時間、あるいは週に数時間の取り出し指導を、数か月から1年ほど行うケースが多い。2014年度から、この取り出し指導を「特別的教育課程」として位置づけるように、学校教育法が改定された。

▶ 「日本語指導が必要な児童生徒」

文部科学省は、日本語教育の必要な子どもの数を把握し、公表している。文部科学省のWEBサイト「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」結果を見ると、子どもの年齢、背景、居住地、また近年の傾向等がわかる。→文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」参照
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/nihongo/1266536.htm

▶ 母語

人の母語の定義は、研究領域によっても異なる。①最初に学んだ言語 (origin: 社会学)、②最も知っている言語 (competence: 言語学)、最もよく使用する言語 (function: 社会言語学)、④自分にとってぴったりくる言語、自分で母語話者と考える言語、あるいは他者が母語話者とみなす言語 (attitude: 社会心理学、心理学、社会学)と捉えられる (Skutnabb-Kangas, 1981)。ただし、これらの母語の捉え方ですべての人間を分類することはできない。一人の人間の場合でも、状況や時間に変化すれば、個人や他者が考える母語の意味づけは変わる可能性がある。たとえば、国際結婚家庭のように、親の言語が複数あるケースもあるし、母語を話せなくてもその言語を母語と考える場合もあるだろう。個人の意味づけによっても母語と呼べるものは変わる。

母国語は、言語を国と結びつけていう場合に使用するが、個人の言語と国家は必ずしも一致しない。また、母語以外の言語を二番目の言語として第二言語と呼ぶことに関連して、母語を第一言語と呼ぶこともある。